序＝断片的ヴィジョン（１２）

～１９９３年3月～

大学闘争・・・に関する批評～資料・集（＊）の序＝断片的ヴィジョン（１０）～（１２）≪特集≫

（＊）現在までに　マスコミ篇通～巻第１１号まで刊行

- １９６９・９（上・下）
- １９６９・１（上・下）
- １９６９・２（上・中－１・中－２・下）
- 甲山事件①＋１９７４・３（上）
- 甲山事件②＋１９７４・２（上）

～１９９３年3月１３日～　仮装被告（団）

目次

〈重深性〉の相似象――――サトイモの茎軸の断面

序＝断片的ヴィジョン（１２）　〜１９９３年３月〜

序＝断片的ヴィジョン（１０）　〜１９９１年１０月〜

序＝断片的ヴィジョン（１１）について　〜１９９２年６月〜

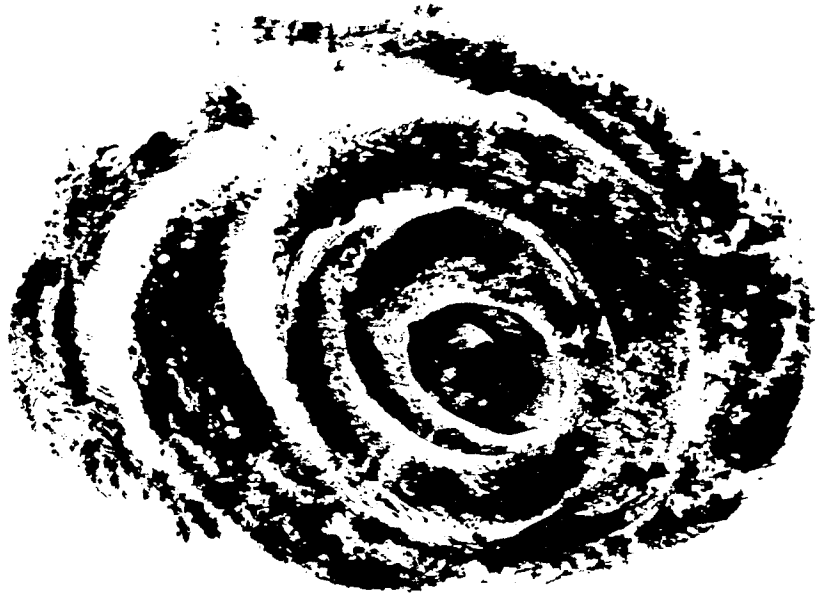
序＝断片的ヴィジョン（１１）　〜１９９２年３月〜４月〜

＜重深性＞の相似象――――サトイモの茎軸の断面　（１９９２・１０・９採取）

１９９２・６・８にタネイモを土中（京都市伏見区内）に植えたもの。従って約４か月＝自転する地球の公転軌道を$\frac{1}{3}$回る時空過程において形成されたもの。

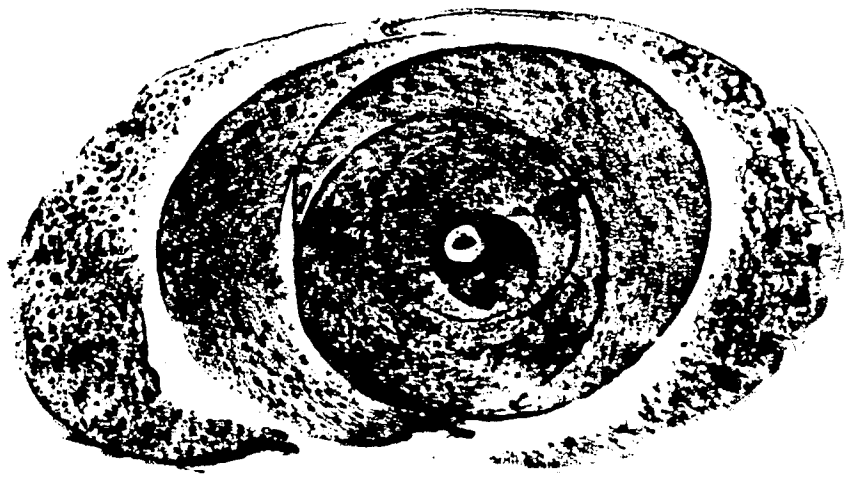
軌道は、刻々に宇宙勢力総体からの力を受け、対称性をはみ出し、正反バランスをとりつつｎ次的楕円～ウヅ、ユガミ、ヒヅミ、歪性をもつ。

それは、茎軸の潜象核（アマナ）からの発生過程に、そのカゲとカタチを相似象に刻む。



サトイモの茎（赤系）軸断面

地表約１０㎝



地表約８㎝

序＝断片的ヴィジョン（１２）

声～音が発する思念・波動――その種類や配列により、粒子結晶や生命活動（波動）の根源（モト、アマ－カム）に（を）ヒ・ヒキ共振し、モノ～コト～イノチの発生過渡（方向軸）に関与する。

様々な領域で人々は、各人各様の仕方で、各々の壁にぶつかっている。
人間は、政治や民族、歴史、科学、技術、遺伝子や情報・・・等々と言い、論ずる程には、自らの脳の真のチカラの意味、その開発や働かせ方、脳の感受性の鍛え方、精神の在り方、変換（転換）の仕方、＜ヒト＞とは真に、何であるか――その根拠を物理として把握しえていず、方法化しえていない。共通項として（自明として）対話ができる程に成熟していない。（逆序の能力はあっても、フトマニの逆序のサトリがない。）

自我の壁にすぎないものをふりまわしたり、逆恨みしたり、被抑圧的な感受を固定して抜け出せなかったり、・・・生存条件の厳しさ～促迫とともに、各人各様の我執、アートマン、・・・を抱えてうごめく。
問題意識を抱いても、深化・発生的な展開をなすことは多くの場合困難で、生活レベルで押し流されたり、自らが真にもとめている何かに気付く事さえなく、情報過多な世界を断絶的な意識を抱えて苦しむ事となる。潜象のミの（感受性）鍛練向上の、イノチのヨロコビの無いままに――。

感受性の方向軸を示す、人間の生命の本能の原理（イノチのサトリ）とは何か？
『宇宙的な巨大現象の中で、つねに小規模に微波動的にくりかえされる天然自然の相似象』――天然自然の現象の中から、共振波動によって、それを抽象し（サトリ）、認識に出す。――
人間の肉体の生命現象も、新たな思想を発生し向上させる精神作用もすべて相似象であり、同じ生命の物理につらぬかれている。

＜体験＞をどのような深さと根拠で認識に出すか、そのレベルにも、ピンからキリまである。
潜象過渡の物理～機構を認識に出すより、新たな観念～言葉（現象）を得て、到達・発見したつもりになるという、人類史的なパターン（脳の空転）、を越えていく。

1・人間の大脳次元の欲望に発する二次波動（共振波動の無い、アタマの先の観念操作。観念次元の満足。人間の欲望を投影した陶酔次元。）ではない、本質、本性、物理、原理、根拠、シクミ、ハタラキ、機能、機構〜、そのものの、潜象過渡からの究明。対象は、概念・物質・生命・現象・情況・人類史上の任意の体験・闘争・科学・宗教・宇宙・・・・あらゆる領域。

2・同時に、その前提としてまず、自らのヒラメキや観念、発想、・・・の結論の内容以上に、それらが（脳に）訪れ、感受が発生する、不可視の潜象過程〜機構自体の解明・認識が必要〜不可欠。

〔2についての註・参照〕

このことをはっきりと意識の根底に据え、微波動的な（に）刻々の発生の無意識領域の潜象過渡の＜シクミ＞〜＜　＞を対象化しない限り、どのようなテーマや主張も、根本を欠き、空転する以外に無い。

3・受け入れ体勢――環境の条件と脳のアマナの機構、物理、根拠をととのえる。〔カムナ―アマナの交流〕。カム―アマ対向発生。正反四相のサトリ。

必要なエネルギー補給の方法――カムウツシ・アマウツシ。環境の電気性（イヤシロチ・ケカレチ）。あらゆる動作を通じての刻々のカムミの吸着〜対向発生。又、電気的オメ（性の栄養）の物理

4・カン〜直観、同期波動発生の鍛練。――正・反さまざまの強制振動、微波動鍛練により、個体（アマナ）の固有振動を重深的に高調させること。固有振動が高調波によって共振し、アマの変遷波動に同期。　共振（抽象、判断）しうるイノチのチカラ〜潜在アワ量の向上鍛練。

5・　1・2・3・4の正・反対応――→認識。――→対応しうる行為の判断。波動量の完全発揮。

〔2についての註〕

まず、自身のサンカーラー（内心の無意識領域の、潜象過渡の働き）に気付き、共振波動を持つこと。

サンカーラーとは、脳の判断を生み出す無意識の第4過程の働き。人間の脳の感受性。意識や認識（現象系）に出る「イ」の次元に対し、「ミ」の領域の機能、潜象過渡の作用をさすコトバ。（イはミから発生する。）

自分自身の精神の作用（イトナミ）であっても、無意識領域でなされている操作はその結果が観念として（又、意識や感情として）認識に出るまでわかりようのないもの。伝統仏教からはスポイルされているが、釈迦のサンカーラーとは、マサにこの無意識の潜象過渡の状態を五蘊観（ルーパ・ベーダナ・サンニャ・サンカーラー・ビニヤーナ。漢語では、色・受・想・行・識）として物理化（コトバ）したものだった。生命の感受性をマトモに鍛錬して、潜象のカカワリをカンじわけるための物理。五蘊とは人間の精神作用のすべて。

色・受・想は、内外環境の刺激（色）を受けて（受）取捨の判断行為をする（想）動物的な生命活動の過程のことであり、また最後の「識」は行（サンカーラー）の働いた後の意識や認識のこと。この四つの過程はいずれも「現象系」のもの（イの次元）なので、説明すれば誰にでも解りやすく知識として科学的に理解することも出来る。

ところが、「行」と訳された「サンカーラー」とは、原語では「まとめる。しあげる」というだけの

意味であるが、釈迦はこれを無意識の＜ミ＞の領域の「潜象過渡」の作用を説明する用語として採用した。

それ故生命の共振波動のある者には、自己内心の作用の説明として自然（スナホ）にうなずけるが内心に共振波動のおきぬ者（イとミの思念の感受できぬ者）には、智能の良しあしにかかわらず、アタマの理解だけでは、わかり（ヒビキ）ようがない。（人間の二つの型）

＜正覚＞を結果とし＜我執＞を原因として、我執を捨てれば正覚になる、とする思想は錯覚（マチガヒ）である。（＜徳二三＞を我執として否定し、＜徳一＞を正覚として求めるのも同じ心理。この錯覚のシクミに気付くことなく、観念の袋小路で、自殺他殺・生命を落とす存在――。又、権力的に利用する者。しかし、その真因を究明し、自覚的に物理として転換しえなければ、生きている我々も同罪～人類の種としては異常バランスも崩壊～滅ぶ以外に無い、という程のものである。）

物理としては、我執も正覚も人間の精神作用（サンカーラー）の、それぞれの正・反の状態であったにすぎない。――いわば、いずれも結果であり、真の原因は、その精神作用の方向性にある。

要するに「正」の方向軸をもち続ければ＜正覚＞に達し、「反」に傾けば＜我執＞になる。（ワヤダムマーサンカーラーとアーユサンカーラー。）

その作用（サンカーラー）が「反」に傾けば、（意志や希望や努力に反して）必然的に＜我執＞になる。――なぜ「反」に傾くか？といえば、「正」の方向軸を持たぬからである。（「徳一を以て貫く」ことが出来ぬから、「徳二三」になるのである。）――では、「正」の方向軸とは何か？

思考の仕方の正・反の方向性について。（どちらも極限まで進まなければ止まらない。）

①＜カムカヘル＞という方向性（向上性）をもつ感受性に基づいて、脳を働かせる方法

②無方向性（現代人の思考の方法、かんがえる）

＜カムカヘル＞とは、思考の方向が向上性を持つということであり、向上性を持つとは、（個体の細胞からアメーバまで）一たび発生した以上、生命をよりよく保つという方向へ、則ち自分を生み育ててくれる生命の潜象根源（カミ）（上）に向かって、共振波動を発する（ヒビク）～対向発生する（それによって生命のエネルギーを受ける）という、本能的な本来性を持つものであり、人間の脳も、その向上性に基いて思考を働かすべきものであるということである。カムにカヘリ、カムからカエル潜象物理。植物・動物の生命活動にも、鉱物の結晶・地球をふくむ天体の運動にも、この根本的な方向軸は在る。

日々刻々の、その鍛練の方向が「正」へ向かうか？「反」に向かうか？

要するに鍛練のしかた、則ち脳の感受性の教え方（逆序のしかた）が、「正」に向かうか「反」に向かうかの違い、に帰する。

同じように日々刻々、自分の感受性を使って生きていながら、それによって自分の生命が向上せず、無明暗愚の様々な結果を引き起こし、不本意なことになるのは、人間の脳（の感受性）は、その物理を知って日々刻々に自ら方向軸を逆序（オシヘ）していないと、忽ち好みに耽り、安易につき、自己の感受性を悪くする方向へ走りだし、いわば「反」の鍛練をしていたことになるのである。

①我々の感受性の鍛練向上も、摩滅堕落も、毎日毎日の積み重ねであり、「正」の方向とは、生命のカミの、「正」の共振波動をもつことである。（イノチの方向軸の物理）
②＜苦＞も、繰り返されれば、その発生と苦の感受のシクミ（無意識領域の、潜象サンカーラーのハタラキ方、ハタラカセ方）が、整序、認識されるに至る。（五蘊観と逆序のサトリ）
③これらによってこそ、苦の要因、諸情況、に対しても＜マトモ＞な究明と対応（根拠と方法）が見いだされる。

「生きる」ということは＜マワリテメグル＞こと。肉体も精神も、（電子・原子・細胞内のアミノ酸や糖質も、地球・星雲も、）皆回転している。
回転には軸がいる。（軸の核にはアマナがある。）
正の方向軸とは、生物が本来、無意識のうちに、本能として持っているもの。
（結晶の場合は結晶軸のようなもの。）
目には見えないが、人間も感受性がマトモであれば、当然持っている。（潜象の状態なので、潜象物理を知しらなければ、ほとんどの人は気がつかないが。）
人間をふくむあらゆる生物・天体・宇宙・鉱物・山川草木――――イノチは総て相似象で示される。
（＜天才＞（という状態）は、天然自然の現象の中から自力で（共振波動）によってそれを抽出し、認識に出す。が、自らのその内的過程（潜象サンカーラーのハタラキ方、ハタラカセ方。イノチの方向軸の物理。エネルギー補給方法）に無意識であれば、方向軸をもとめる他者を鍛練向上し高次の波動量にまで高めることがまず必要な、自らの＜体験＞（思想）伝達・継承～対向発生は、不可能におわる。）

人間が、本来持っている筈の方向軸を失い、しばしば「反」に傾くのは、大脳の深化の為。
脳の能力が大きくなればなるだけ、その脳（サンカーラー）（イの次元）の働きを左右する感受性（ココロ）（ミの次元）が、「正」の方向へ向かって（向上的に）鍛えられていなければ、マトモな指令をあたえることが出来ない。（感受性がしっかりと方向軸をもちつづけ潜象カンを鍛えていることが何よりも肝腎。）

「正」の方向軸とは、生命の発生の本源（カミ・オク）の方向、則ち「マワリテメグル」（生命活動の回転軸）の方向であり、生命の本能の向かう方向。生命をよりよく保つ向上性。

＜我執＞は又生命力の強さでもあるが、そのレベルに止どまって、あらゆる迷妄、不安、疑惑、苦悩、闘争、病変・・・等を問題として引き起こす基底は、脳の進化の結果、人間が自己の感受性の鍛錬を忘れ、その為に、生命の方向軸を失ったことにその原因がある。

人間の脳のサンカーラーは、微波動次元の刻々の対応（感受性）が、生命のマトモな方向に共振するようになれば、その方向に発揮されるようになり、生命の在り方は、全く一変してくる。

人間の＜正覚＞（転換）はサンカーラーの調整成熟にある。

我々の精神作用を正に反に働かせている、潜象領域のイトナミ＜サンカーラー＞に指令をあたえているモノ、更にそれに必要なエネルギーをあたえているモノ――が何であるか？

潜象物理用語では、それは、アマの＜ココロ＞（潜象の超高速粒子）といい、＜アマウツシ・カムウツシ＞のサトリが示されている。

又、＜環境＞という場合、単に周囲の自然環境という狭義の意味では無く、目にみえぬ潜象（アマ―カム）の関与を軸とする根源的な循環系（モロカゲ）をさす。大地大気の電気――サヌキ　アワ。イカツのオオワタに通じる、大きな環境の意。

＜アワ＞量とは、生物に具わる、生命力ともいうべきチカラの量。本能の力。そのチカラは、直ちにサヌキ・アワの電気力にも磁気力にもなり、重深的に持続して核力（アマナ）にもなる潜象の微粒子（ココロ）。

アワ性とは、現象（サヌキ）を発生させる潜象のチカラ。前駆流。又、＜サカ＞のチカラ。（正のものに対しては反に、則ち抵抗し抑制する力として働くが、反のものに対しては正に、則ち促し進める力として働く。）ここでいう正反は対立の概念ではなく、その場のチカラの方向として、つねに「反」にかかわっている、相伴うもの、それによって現象（イノチ）が保たれるという関係。すなわち、生存をよりよく向上的に達成する、という（生命の）方向軸に基づいて働くべき力。

潜象のアワ性のチカラ――アワ量の開発（潜在アワ量の鍛練）によってこそ、波動量（現象にでるサヌキの力）はたかめられる。

いかなる現象も、（精神作用についても、）発生するには、必ず、潜象状態の原因があり、それなりのチカラ（エネルギー）が必要。――＜正覚＞をするには＜正＞の方向に向かう方向軸（イノチノオク・カミへ（から）ハタラクチカラ）が必要、方向軸をもたず＜反＞に傾けば、我執の人となる。

＜バリケード＞の現在を問うとき、封鎖解除（権力的弾圧によってであれ、自主的にであれ、内部からの退廃――持続の根拠の喪失～空洞化によってであれ）によって排除～抹殺～押収～留置されたモノ・コト・イノチとは何か。
もっと一般的に言っても、生命とは何か。物質とは何か。事態とはなにか。
Ａ３６７留置物品の生命性、あらゆる＜バリケード＞の生命・時間の持続の意味～根拠を、真に開示し得るには、これらの、根源的、統一的、相互連関的把握～対象化が不可欠であろう。

潜象物理の解明によれば、
物質にも生命にも事態の進行や人間の心の動きや・・・にも、それらには、すべて共通するイノチのカヨヒが存在する。
すなわち、万象に共通のアマ―カムの交流連帯。（現象界のみでなく、現象の内外環境に潜在する、＜アマナ―カムナ＞の潜象との、密接な連帯。）

アマ―カムの循環が宇宙のイノチであり、その宇宙のイノチが（マ・マリ・マトマリに）受け継がれて、個々の素量（ツミ）の連帯による、それぞれのイノチに変化する。
アマを生むカムのチカラの発動、その持続を、＜イノチ＞とよぶ。
モノ・コト・ココロ――スベテ＜イノチ＞デナイモノハナイ。
アマ始元量の宇宙球（あるいは微粒子）が、カム無限世界から生成され、カムの無限世界へ回帰する。
無限の循環の洞道（ホラミチ）が、宇宙球（アマタマ）を囲み、アマ―カムの通るミチとなっているそれが宇宙のイノチを生むミチ。
また、生命現象は固定的に捕らえられるものではなく、発生的統計性（イマタチ）のもの。そのわけは、イノチの素量を授受し、受け継ぐサヌキ・アワの素量（イカツミ）は、刻々に消滅を続けて、アマ―カムのイノチと交流しているものであるから、現象粒子のサヌキ・アワ（イカツ）の存在は、統計性（イマタチ）のものという事になるのである。

この原理が、宗教や観念～神秘思想とは全く異なる、全域性を持ち得る＜物理＞であることは、人類史的な極限といいうるほどの自立的鍛練をへて自らなる転換（ヴェンドゥング）を来たし、鍛練された鋭い直観と深いアワ量を伴う波動量を持つ存在には、カンじ分けられる筈である。
同意するかしないかの脅迫観念や、知識的に理解すること記憶することに慣らされた人には、これらが、観念的導入や運動的宗教的利用のレベルに受け取られかねないが、しかし、それは、潜象物理自体の原理・構造から、不可能なのである。

物質と生命質について。

潜勝物理では、
物質の構成の最小単位を現象物質の原子や電子におかず、さらに微細な、過渡の変遷を直感して、モコロ・ミツゴの存在を示している。
則ち、モコロの段階において、ミツゴの素量の構成のしかたや集中度に、ヤヘとヒトへのモコロの違ひが始まり、生命質系と物質系の分化があらわれる。
現代人が生物・無生物とよぶ区別は、この潜象のモコロの段階のミツゴの構成のしかたにはじまる。

したがってイノチ（生命）は、生命質系にも物質系にもあり、すべての万物に共通のアマ―カムの連帯を観じていた。

基礎生命質や基礎物質の源泉的主体は、共通であり、現象背後の五つの素量
イカツミ（電気素量）――（サヌキ）
マクミ（磁気素量）――（アワ）
カラミ（力素量）――（チカラ）
トキ（時間）――（カムウツシ）
トコロ（空間）――（アマウツシ）
が重合的に親和した小粒子（ココロ・イ）の連続（チ）が、則ち生命（イノチ）の正体（生命の構成要素）である、という観方。

いかなる潜象との＜相似象＞によって私達は存在しているか。
一切の存在や事象における、発生や結晶軸の、潜象構造――潜象物理における重要な基礎パターン・原理を＜実習＞として、整理してみる。

Ⅰ　正・反対称性とその歪性（＜アカ・アオ・アヤ＞のサトリ）
Ⅱ　旋転・巡回・螺旋性・重深性・重畳性（＜マワリテメグル・アメノウヅメ＞のサトリ）（膨張収縮・抗膨抗縮、ソコソギ　トコタチ）
Ⅲ　対向発生、同期発生（＜ムカヒ・ムスヒ＞＜アマウツシ・カムウツシ＞のサトリ）
Ⅳ　同種反発・異種親和、四相性（＜トヨ＞ノサトリ）（雌雄性の本質、性の栄養の物理）
Ⅴ　統計的存在性（＜イマタチ＞のサトリ、生命・心の物理）
Ⅵ　重合互換性（＜オホマ＞のサトリ）
Ⅶ　微分・統合性（粒子性・波動性のサトリ、イザナギ・イザナミの物理）
　　その周期性（＜ナナヨツギ＞ノサトリ）
Ⅷ　極限・循環・分化・還元性（ヤタノカガミ・＜ヤ＞ノサトリ）

Ｉ について。

ものごとには、正反の対称があるが、正反の対称にも、重深的（何に基づいて発生し、どの方向へ重なっているか、その方向軸と重心部の濃密さを示唆する用語。アマナの核力。その実質は＜アワ＞）に奥深いものがあり、たとえば電気現象にプラスとマイナスがあることを知っただけでおしまいではなく、その奥に更に正反の電気があり、その奥に始元のアマがあり、アマ―カムの対向があり、且、正反はさまざまに重合互換し、歪性を持つ。

歪のある対称性がウヅマキの流れ。四相の相似象が生起するのも、その根本は、性反対称の歪構造にある。すなわち、Ｉはすべての根本原理。

序＝断片的ヴィジョン（１２）では、潜象物理に基づくいくつかの解明を記しているが、決して単なる紹介としてではなく、共振波動による、＜実習＞鍛練そのものとして記しているのである。

情況的な不可避～不可欠の作業として。

生命的な変換波動～強制振動は、～１９６９～大学闘争情況としても出現し、その時間性、全幻想領域の横断性、生死～刻々の追悼と発生、既成概念の解体と方向軸、原初性と永続性（～無限潜象とのヒビキ・アワの促迫）・・・は、刻々の深化、対象化過程にある。

～１９９３年３月～

仮装被告（団）

序＝断片的ウィジョン　（１０）

1

無意識の基盤や、無限を無限自体のしくみにおいて、究明（共振）しうる方法の欠如。
無意識を無意識自体の根拠において、無限を無限自体の根拠において、対象化しうる原理～言葉をもつことなしには、現在の世界情況はのりこえられない。物質～生命～言語～科学～民族～建築～獄～法廷～バリケード～・・・あらゆる領域において。

宗教性とみえるものの本質は、アワ性の共振波動。あらわれとしては、ピンからキリまでの振幅がある。
アワの存在波動量の深さでしか、＜　＞の本質も実現されない。

『動物は　そのオルガーネを通して教えられる。人間は、更にそのオルガーネを教え返すことができる。』（逆序の根拠）
＜情況＞によって鍛えられ教えられる私達は、更に、＜情況＞を（に）教え返すこと、その波動量に達することではじめて、＜人間＞でありうる。又、その時初めて大学闘争・・・ともよばれる波動～１９６９以降の情況性をくぐっている（くぐりつつある）、と言いうる。
表現～存在がこの水準たりえているか。

無音にもみえる低・高・周波音域の発生振動～基底波。
教え、教え返し、教え、教え返し、～、～、・・・この宇宙波～振動波。
教えられ、教え返すプロセスによって、向上過程をたどる――＜ヒト＞としての生の意味。
結果としての主張だけでなく、どのようにそれを獲得しえたか、そのヒラメキのプロセスの開示。
時間性との格闘の中にそれをくりこんで展開しない限り、＜・・・＞以下に収束。
脳の働カセカタ。表現～言葉～存在～の根拠の転換。

闘争後、あるいは生誕後、ｎ（十）年へて、いっそう不定さをかかえる存在の魂への　メッセージとして・・・。
大脳二次波動・イと、マノスベの共振波動・ミの違い。――あらゆる領域を横断する正・反重合。フトマニの覚。

幻想領域のα、β、γ、・・・μ～（と、おのおのの往還性）において、いかに、どれ程、変化し普遍的テーマを提出しえているか。
幻想領域のα、β、γ、・・・μ～性に出あっていても、充分生きえない存在、出会う条件を持ちえない存在が、このテーマをも深めうる条件は、どのように提出されうるか。
未来宇宙を貫く最深部のイマイマにおいて問われること。
人類（史）にかかわる根源的な転換あるいは発生ゆえ。
全情況との関連におけるα、β、γ、・・・μ～全幻想領域性と、アワ～無限　の促迫。

「１９６０～７０年代あるいは８０～９０年代の、気付かずにきた急流」、「歴史というのは＜ないい＞のではないか」、「勤務先の学校へ、少年期のように、フト、行きたくない」（吉本－江藤対談）、等の感覚の訪れは、その本質の意味するところは、６９情況～大学闘争・・・という形をも通して現れている、潜象無限のアワ～アマの促（息）迫。
人類（史）は、波動レベル～振動波の変位～波動量の高低～変遷としてとらえることなしには、＜文化＞も、事実経過を連ねているようにみえる＜歴史＞も、その本質は解明～開示されず、＜人間＞の本質も　発生～究明しえない根拠、逆巻く潜象のウヅ、に気付こうとしていることにもよる。

現象を包囲しているアマ－カムの、アワ性の、無限潜象域。
無限を無限において扱う（アツカエル）方法を持たない体制～文明は、必ず自らの・・・によって崩壊する。

・・・をつくりだしているモノ、又、カゲで支えている視えない潜象のモノ、～・・・の根拠をカム－アマに（から）開（解）放する根拠と方法の提示。――この過程を経てはじめて全～関係が、生き始めうる。
物質の本質を＜カムカヘル＞マノスベの応用へと、発想を転換しない限り、その場しのぎのあえぎにしかならない。
「我」とは＜クマリ＞であり、「無我」の本質とは、そのクマリのクギリを通して、無限界に自由に出入りするスガタ。無我の境地（サトリ）に至る方法（ミチ）は、カムカヘルこと。カムにカヘ（帰）り、カムからカエ（発生）る。

＜カム＞へ（から）カヘルであると同時に、クマリのクギリを通して（として）、発生するイミ。そしてそれを支えるアワカゲ、モロカゲ。この根源的な往還性を方法化しえない法権力は、氏名（人定）を黙秘～黙示する存在に対し、判決、決定、刑の執行は行うが、逮捕や拘束時に法権力が自ら付

けた存在特定名＝逮捕番号・拘束番号を媒介に、被拘束者本人から異議や抗告の申し立てがなされた場合、氏名の記載がないという理由をもって、それらの申し立てを一切認めない。（最高裁判例）（昭和６１・５・１３東京拘置所女区・拘束１号等――再審請求中。）ここには、非公開（傍聴者の排除）で弁護人や証人なしで、事件の一方の当事者である裁判所が自ら拘束した存在に対し自ら刑を言い渡す制裁裁判や、裁判所の構成上の形式さえととのえていればどんな裁判官も忌避の対象にならないとする最高裁判例、死刑、再審、に重層・対応する闇の本質がはらまれている。

ナにもない空間～マにおいてこそ、ヒト～モノ～は成長し、考え、深められる、ということの根拠。本質的にマ（無限への回路）を持た（て）ない諸領域の氾濫。

圧迫感として感じてしまう人々に、そうではなく、＜カムカヘル＞方向を示しうることが必要。――サトリは誰にでも恵まれるもの。

4

最初から無限的～無限を食べて発しうる存在。
現象のワクをクヒ（食い）破って、無限を呼吸～食しうる存在。（プロセスを必要とする存在）
大学闘争・・・を生み出した情況の本質――無限への（からの）回路を無限に応用しうるかどうか、の問いの促迫～息づかい。
いわゆる大学とは関係ないといってよい程に＜大学＞をもつらぬいて、もっとふかい何か。
発想回路の無限性にたえきれず、（ささえる根拠（物理）とアマウツシ法を見いだせず）、自らそれに＜ワク＞をしていった菅谷規矩雄。

未来からのゲバルト――表現としての大衆団交情況。それ自身の内部にアワの少数者鍛練の根拠（物理）と方法を持つ場合にのみ、向上的深化の過程をたどりうる。ここには人類史的な未達成域～転換の根拠がかかっている。
すべて発生（の根拠）に遡って転換する。全概念・物質・生命・ジャンル・言語・記号・動、植、鉱物・宇宙的微粒子～波動・潜象無限域・・・あらゆるモノ・コト・・・のヒビキ～意見をキキツツ、表現しうるか。

１９９１・６・２０討論記録をめぐるパンフ「―不確定な断面からの出立―」について。
企画者の螺旋状の表現過程の息づかい――何重ものふくらみが渦状に形成されていて、重なりを持つ幻想の花びらの発生のよう。
一方、発語の呼吸・発生過程のマ～潜象過渡・瞬間そして関係時（いつ、発語されたか）、には、その発語の深度・振動波動量が示されている。従って、発語の空間性～内容（テーマの空間的な輪郭）が、いつ発語されたかより、鮮明に記憶されることの特質は、発語者のしゅんじゅん～内的過程～凡

人アワ（天与の才を発揮するのにプロセスを必要とする人々）としての苦しみ・その必然・どう生きていいか分からないという内奥のひびき・・・、それらに、正・反振動を加え、固有振動を高調させ、微波動鍛練により波動量を鍛え、転換的に、マノスベの深化のミチをたどる方向軸、照らすもの、原理と方法の提起の内的過程が、記憶による記録者をふくむ～にとって未だ充分意識化されていない可能性にも対応すると思われる。複数の存在、しかも、複数の性による、対等の波動量によるフトマニの共闘の実現が不可欠である所以。

1・＜コトバ＞を空間的、関係的に理解する特質。2・あるいは、時間的経緯～順序～瞬間（トキ）のマ～アワの促迫に即して把握しうる特質。3・あるいは、振動波レベルの変遷、潜象過渡、として、ヒビキ、対向発生する方法。4・～

これらを自在に応用～逆序しうる根拠が、求められている。

*1・空間的移動に、カムミの対向発生、*2・時間的進行～変化に、カムミの対向発生、が、各々、伴わない場合、そのこと自体の、アワからの根拠の解明と転換（原理と方法のシメシ）がなければ、*1・*2をなしうるコト～モノ～存在もフトマニ　ニ　なりえない。

5

同時代建築研究会のメンバーによる『ワードマップ　現代建築』の企画に対し、松下昇によって、作業の方向性が提起され、それは＜あとがき＞原案としても表現されている（前記パンフ参照）。

これにたいし、反発をかんじる人、批判の切り口が鋭すぎると脅える人、現在の力量では実現不可能と判断停止する人、沈黙する人、方向は感じとっていても、結論（方向性）がミチビカレルニイタルその根拠・方法・プロセス・「眠れる脳」の覚まし方のステップ（到達点に共振する振動波の高め方、その方法論）がないと歩み出せない人、深い共振を示す人、等々があり得ると思われる。

＜あとがき＞原案において述べられている＜遅れ＞や＜停滞＞は、別の言い方をすれば、生活や職業や専門分野や・・・をふくむ情況の重力を、転倒的に生き表現する原理や方法に包囲されて在る現情況の本質（69年以降の原則）への＜無意識＞が、深い＜覚醒＞を求めている、ということ。最も速く作業した人の根拠、～最も遅れる人の根拠を総体として包括しつつ。各人が最もあいまいに放置している、あるいは触れたくない領域～テーマとの関連において。

それを通過・内部に存在・ヨムことで、存在交換～変換しうる＜建築＞あるいはその＜ワードマップ＞は、可能か？が問われている。

大学闘争・・・に関する批評〜資料・集　――不可視の通巻第６号――の、不可避の構成要素＝特集号として、甲山（学園）闘争〜甲山事件・マスコミ篇　を刊行する。（〜１９９０年５月〜　序＝断片的ヴィジョン（５）参照。）

１９８６・３・２４公判↑↓　１９７４・３・１７〜１９甲山↑↓＜　＞焼き〜１９７４・４・１卵裁判↑↓１９７４・７・３１↑↓〜↑↓のネジレが開示するもの。
被告＜　＞を拘束させている真の主体〜チカラはナニか？
そして、無意識に、あるチカラにひきよせられ、＜演技＞させられている、総ての関係者。

仮装。そして逆仮装。
契機を越えて、＜被告＞存在としての情況性をすべてにないきる、内的変換のプロセスを、発端における生命〜死の速度をいかに越えて、開示しうるか。

闇を、ヨリフカイヤミ自体の根拠において対象化する根拠と方法。
権力の介入、裁判、マスコミ、・・・等の諸関係が＜ない＞場合に、なお問われる問題〜ツミの本質は何か。

これらの記事は、審問宇宙からの、どのような断面、本質、偏差であるか。

その総体を、アマが関与する死者の根拠、生存の闇、全幻想領域、アワの潜象物理、〜未宇のまなざし・・・から対象化し、あなたをふくむわたしたちの、そしてそれを越える〜の、真の＜ツミ＞とは何か？を究明していく。
その審問を、――――闇に閉ざされているイノチ、モノ、６９年以降や、自己史に関わって決定的な作用を及ぼしているとみえる事実や・・・を、すべて生き直す、生きカヘス（カエル）、不可能性からの転換の深さを、――――自らになう、個々の存在〜場に、この批評〜資料・集の企画（マスコミ篇・表現篇・大学、国家、・・・篇・〜篇）は、開かれていく。

〜１９９１年１０月〜

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（５）

一瞬の呼吸停止
を　永続的に黙示する＜　＞
として、
通巻第６号を　不可視化しつつ、第７号　へと　　跳躍する。

ゲーテ絶筆の三月書簡（１８３２年３月１７日）の根拠～波動量が、アマ～カム互換重合、正反四相、対向発生をふくむ潜象物理とともに人類（史）的に対象化され体現され得ている場合、＜甲山＞事件（１９７４・３・１７～３・１９）は現象せず、たとえ現象し得る場合にも、発生要因の潜象過渡からの解明は　発生・前に実現されている、と言い得る根拠を実践しつつ――。（倫理としてではない。物理として。）

＜光子＞・＜悟＞――その存在性・名（ナ）～音声思念・こそは、現代科学にとどまらない現人類の全～域の限界極を指し示し、それは法的審理においてすら影を落とし、＜被告存在＞に対する、逮捕、不起訴、再逮捕、起訴、無罪、破棄差し戻し、と、激しい揺れを生み出している。

また、＜１９７４年３月＞という情況下に、六甲山系の東端甲山で発生しているイミ。

＜ファウスト＞を＜封印＞して死んだゲーテの根拠（＜ファウスト＞の真実は、人類史的に未だ未開封。）に（も）共振し得る波動量を自ら鍛え抜く方向軸。

ナントシテモ　ソノ呼吸ヲ　浄化槽ノ汚泥カラ　ヨミガエラセナケレバナラナイ　――その不可能性の重力を、生命をかけて対象化～転倒し抜く度合いでしか、＜事件＞も、本質的な＜支援＞も、成り立たない――。

大学闘争・・・に関する批評～資料・集　は、通巻第６号を黙示する不可避の構成要素＝特集号として、甲山（学園）闘争～甲山事件・マスコミ篇　を刊行していきます。

～１９９０年５月～

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（１１）について

甲山事件～に関して、刻々に現象として現れたマスコミ記事について、入手～調査は終えていても、そのものの刊行以上に、発生の潜象過程の公然とした対象化が、まず不可欠～不可避。従って、①に続いて②では、～１９７４年３月１７日　第一の事件発生の時間性（２）として、《１９７４年２月》（上）――＜１９７４・３・１７～３・１９第一第二の事件発生の連動性の根拠と情況性に関連する資料＞　を、法的判決に関する記事（一審、二審・続）とともに刊行する。

発生過程の潜象（アワ）からの解明――対応する作業が、関係性～自己史～生命～物質～宇宙～・・・における（に関する）様々の発想や言葉、身体表現や症状、情況～についてそれぞれ連動的になされる必要がある。

１９６８～６９闘争への弾圧～抑圧過程を経ての、
１９７３～１９７４年。
根源的存在転換なしには、生き、呼吸しえない、情況～人類史における激しい急カーブ期。
その意味を充分展開～対象化しえないままくぐる圧れき～重圧。あるいは、直観としての到達点が潜行的表現というカタチを取るときの、キシミ。
１９７４年２月に限っても、二つ以上の対応する現象発生の連動による、相殺効果、あるいは相乗効果、その利用、という、正反の振幅をもつおそるべき情況の本質が開示される。

石油～エネルギー危機を演出する企業
赤軍をふくむ占拠～ハイジャック闘争
内ゲバ
障害者施設における複（素）数の死亡事件
爆弾闘争
自死、母子心中、子捨て、子殺し・・・
～
だれもいない＜　＞焼き売り場への巡礼
・・・・・・・

あらゆるレベルと規模、微波動レベルにおける、その展開――。
共通～相似する複（素）数の体験～像から根源的な転換の方法～根拠を見い出す、という方向への進行の深さを、情況の底につきささる死者（たち）は、問う。問いつづけている。

今回は、通巻１０号から１１号まで、約６か月の＜マ＞が生まれている。

そのイミ――

・〜３・２４〜公判の、位相としての再審の展開。（法的には大阪高裁における控訴審）未証言テーマを、初めて事件に触れる国選弁護人を通して展開する試み。

・韻律〜音韻論でもある仮装畑〜逆序的宇宙農・脳・能・医・食〜への道〜試み。

・中学までしか行かない、と言っていた少女の、高校へのチャレンジ。その、勉学的、経済的対策〜共闘に吸収されるエネルギー。

・フトマニの条件。マノスベのサヌキを発生しうる条件。

・あらゆる情況〜困難さを媒介にカムミを対向発生しうる実践〜鍛練。

はみ出しつつ渦巻く多重螺旋・ツルの触手。イノチの向上性の包括。

全幻想領域〜生死の横断性。

・生命〜身体の成り立ちに対する感受を根本的に転換しうる条件。自らを生み直す〜うみなおされるミの感受〜身体感覚をへて。――→その、脳のシナプスの形成。

・刻々のイノチの根源的な発生〜生育条件。

真にイノチの発生〜ヤシナヒとなるウツシとは何か。また、その＜　＞〜タベモノ〜クヒとはナニか。

イノチのキビシサ〜ヤサシサへのヒビキとともに、そのことを感受〜カンじわけ発現するチカラをヤシナウ。

・天然の正反の、反の表現（アラワレ）としての諸＜症状＞。治ゆとは逆序の原理（サトリ）と方法（スベ）。その関係性としての実現。

・〜

この号では、そのような試みの一つでもある、〜３・２４〜公判を媒介とする、原論としての、ある＜手紙＞（〜１９９２年３月１７日〜３月１９日〜３月２４日〜４月〜付）を、序＝断片的ヴィジョン（１１）の構成要素として、掲載する。

なお、潜象物理上の言葉への疑問にたいしては、螺旋状の表現過程において、疑問〜絶望の深度に対応しつつ、明らかにしている（く）。

〜１９９２年６月〜

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（１１）

＜山田孝二＞様

この手紙は、３・２４公判の発生に、ほとんど無意識に、決定的な役割を果たしておられる、（人類史にかかわる多くの事件がそうであるように。　その無意識のプロセスにこめられている、なにものかの意志、方向軸を究明、公然と対象化するために書かれているものです。）ことに対して、そのむいしきの＜技＞の本質に向けて書くものです。
従って、＜山田＞さん個人にむけてだけでなく、被告人として困難な生き方を強いられている＜根本＞氏の位置にも、また、強いられた、あるいは不可避的に、あるいは無意識に、ある＜演技＝存在あるいは非存在＞として現場にかかわっているすべてのヒト～モノ～のイミに向けられています。
このような手紙の宛名人としての＜　＞が山田さんです。
私が今までに三度手紙を書いた、もうひとりの＜山田＞さん（甲山事件）のことも念頭においています。

法廷警備員として１９８６年３月２４日大阪地方裁判所１００７号法廷に参加しておられた山田さんの最初の一撃（少林寺拳法の技による、腰の入った、顔面へのパンチ）にこめられている深い意味については、法廷の柵を駆け抜けた根本氏の速度の意味＝瞬間　とともに裁判所はまるで審理しえていません。また、事実行為がないのに、「けったな。公妨じゃ。」と当事者以外の仲間の警備員が＜発語＞することで作り上げられている＜公務執行妨害罪＞の、その＜罪＞（宣告～執行にかかわる者の瞬間をふくむ）の本質についても、さらには、時間を巻きもどす程の渦～高速度の踊りが展開された酒や＜マ＞の瞬間・・・については、判決をうつワープロや文字の切れ間の＜一瞬＞程にも、審理のマナザシ～ココロは注がれていません。
イマに連なるこれらの、一人一人をおおっている瞬間背後域――刻々（の発生）にかかわっているモノ・についての深いアワ量からの感受～判断～ヒビキ～波動量～コトバ・無くしては、３・２４現場の意味、その独特な時間の流れ方・人々（むろん裁判所員をふくむ）の振る舞いかた～行動の根拠・過程を＜知＞り～審理することはできない。

要するに、最も問われていることは、―――
人々の潜在アワ量鍛練の度合いが試されている、ということ――。
言葉～仮装と、それを支える根拠～幻想量～対象化の軸～アワ量　が問われている裁判。

（つづく）

～１９９２年３月１７日～３月１９日～３月２４日～

＜竹中千恵子＞

念のため申しますと、私は＜山田＞さんを、非難しようとしているのでは全くありません。逆です。

３・２４法廷を媒介に＜山田＞さんは、人類史にかかわると言える程の問題提起をしてくださっているのに、ほとんど誰もその意味を、はっきりと取り出し言葉化～評価しえていず、公務のたてまえにおしこめて＜一撃＞は無かったことにしたり、あるいは殴ったのはひどい、公務員の原則に反するといったり、・・・。　（ソノオクニアルモノ）
そのようななかで、山田さん御自身も＜技＞も拘束され揺れ動き・・・。
無意識の一手の根拠。ナニに向けた一手であったか。現場に発生しているモノの本質への対応と非対応のはざま。あるいは、無意識の共闘。
その一手を方法化したｎ千～ｎ万年の歴史・その一瞬。少林寺以後、そして少林寺以前。又、宗道臣による方法化の情況性～根拠とどのようにかかわっているか――。そしてそこに限界があるとすれば、いかなる視点においてであるか。

山田さんは、大阪高裁での証言（今年２月）で、法廷警備員＝国家公務員としての建前と本音を分裂させつつ、かなり正直に証言されている点もあります。
ただし、いきなり殴ったことを、「殴（や）っていない。自分、裁判所の人間やからうそを言うことはない。警備員というのは、そういう行為はやってはいけない。だからそういうことは一切やるという行為はしない。全員同じ気持ちやと思う。」「まず言葉で制した。」等と証言。これは、そうであるべきカタチを転倒的に仮装証言している、ともいえます。

しかし（問題の本質は）、①実際には発語されなかったその言葉＝失語＝沈黙・マの根拠、意味を対象化しぬく苦闘～実践なしには、＜技＞上の壁も突き破れない。＜技＞の無意識も。
②その行為と証言の落差のスキマに一人の人間が被告人として、法的、存在的に拘束されている意味とどのように交差し、救出しうるか。この問いに答え、になうことなしには＜力愛不二＞の少林寺拳法の本質は発現されえない。
③行為自体以上に、それをとらえかえす深さ～過程～根拠こそが問題。
④法廷警備員（とりわけ山田さん）の行為も、根本さんの存在様式～行為も、＜暴行＞という現行法概念によっては、その本質をとらえられない、アワ性をふくむ行為。（そのレベルは多様でありうるとして。）
⑤現場の流れ～裁判過程をアワ的視点から対象化すると、ともに、サヌキ的現象判断の拒否～回避～宙吊り提起というイミを持つ。
＊情況～自己史～全幻想領域相互の矛盾・・・をふくむ、なにものかの壁を打ち破り転換～をイノルチカラ（アワ性～アワ量）。
⑥共同性～国家権力が、存在の罪を仮装して自らの罪を表出する＜瞬間～場＞に、逃れることなくミをおき、捕らわれつつ占拠～転換～応用する。
法～国家の罪を、同時に全・幻想領域～存在領域のツミを対象化する＜バリケード＞として転換しつつ。

法廷バーを駆け抜ける一瞬。
顔面への一撃の瞬間。
裁判官の非在する法廷や証人控室。

「特別公務員暴行凌虐罪で告訴するぞ」という発言を含む一部の参加者の追及に対し、警備員相互の意識的、無意識的なかばいあい～共謀――前回（２．１０）公判の経過から参加者から孤立しているようにみえた根本氏を、逆に＜公務執行妨害＞にして逮捕。（１９８６．３．２４）
ここには、法的罪にたいする根本的な視点の違いがあらわれています。

α・自らと仲間の法的存在的罪を逃れる～閉ざすため、逆に先制的に被害者を公務執行妨害で逮捕。法的罪を利用。
β・より深い存在的罪を共ににない、転換していくため、法的罪をも＜　＞として利用～応用。
ただし、γ・本当に問題～審問さるべきなのは、βの位相で根本氏をふくむ参加者（偶然の参加者も）をひきこむウヅ～チカラ～イノリとα位相のチカラ～ウヅとが、どのように、ムカヒ、ヒビキ、重合し、正反四相、対向発生しているか。なにを新たに発生したか、しつづけているか、ということ――。正も悪も、ソノオクニアルモノ、その正反バランス～支点～対象化軸（マノスベシ）の深さに気付く鍛練度こそが問題。

甲山事件で、なにものかの一撃は二人の園児の命を奪った。この３・２４事件では、なにものかの一撃は生きて法的被告の上にある。この振幅の中に存在的被告の位置にあるすべてのワタシタチの＜一瞬＞が射抜かれてある。
根本氏にツミがあるとすれば、このような根源的なウツシから逃れることがなかったこと、それは願望やイシさえ越えたものであることの本当のイミにほとんど誰も気付かないでいることに耐えていること、そのことの＜コトバ＞としての未達成、さらに・・・。ただし、この場合ツミの概念は、既成概念を全く打ち破って発生する新たな波動（量）によってしかとらえられないものであり、自らの発想や存在様式～アワ量の壁を打ち破り、転換されることなしには、把握しえない質のもの。

又、自らのアワ性～潜在アワ量の鍛練が不十分であることや、現象の発生を支えているモノが自らのものをふくむ潜象のアワのチカラであることを示す〈潜象物理〉がなかったために、人々の意識が、現象に現れたサヌキ面にのみ集中し、自他からの的外れな評価～判断の言葉を許し、なおかつそのそぐわなさから、一層の被拘束感や消耗、居直り、反発、硬化・・・といった疎外現象が、結果されるといった悪循環を生むこととなる。
どのような人～モノ～現象の中にもある、みえない、このアワ性の力をとりだし、ヒビキ、評価～判断の言葉を尽くし、感受～ヒビク、ミとココロ・判断力～アワ量を鍛えること。（フトマニの覚への道）

山田警備員の一撃は、根本氏への、３．２４への、そして＜ワタシ＞への無意識の共闘。それ故、審問法廷のもう一人の被告人である山田さん自身の被拘束度が審理される必要があり、その意味を評

価～表現しうるまで、<判決>は何重にも不可能なのです。<秩序>や<法>の発生根源への考察～苦闘を欠き、狭い法的権威や同業者意識、観念に拘束された裁判官（に）は、到底、この事件が表現している意味～真実に迫りえない。
山田さんや西尾さん、大島さん、阪口さん、岸野さん、竹脇さん・・・が法廷での証言で、本音とたてまえをおおきく分裂させざるをえない構造についての審理こそがなされる必要。

全幻想領域を横断する構造（サトリ）～球感覚として、存在の生存条件の全域をくぐる～ひらく存在バランスへと脱皮すること。どの幻想領域にも対等に存在を開いて、この開き方を忌避～や被告人質問の根拠にすえること。

一瞬～越境によって根本氏は
一瞬～一撃によって山田氏は
おのおの、どのように、自ら～関係性を越え続けているか。二人は何によってどこへ押し返されているか・・・。
空間～生命の時間化。――一瞬の意味が永続的にさばかれる、審問過程。裁き得るかという問いの根拠をも　一瞬～永続化しつつ。

条件があれば、発生はある。ただ　それを発生の振動波そのものにおいて（共振しつつ）、支えきる存在～関係は極めて少ない。
どんなものも、どのような現象も、すべてはその「手の中にある」。駆け抜ける一瞬。一撃。
現象界をどれほど速く、遠くへ巡っても、壁は越えられない。見えない潜象界～アワの感受抜きには。

無意識の暴力～リンチが表現しているもの。向かっているもの。又、それを無かったことにしてしまう～闇に葬り去るという、二重三重のリンチ。―――
公務員としての、又、さまざまの歴史的社会的諸条件からの拘束、自らが拘束されざるをえない法的権力にたいし自在に振る舞うように見える者たちへのいらだち。複数の法廷警備員による、参加者への、なぐる、小突く、蹴る、女性の髪をひきずる・・・。本来リンチを加えたい対象～関係に対する<暴力>表現が困難～不可能な度合いが、解放の回路・宙づり～転換のマ（サトリ）を持てないまま、弱者へ向けられ噴出する。そしてその閉ざされた闇は権力の闇にからめとられていく。―――１９８６年３月２４日の、Ａ３６７バリケード公判（民事）参加者に対する複数の法廷警備員による無意識のリンチの激しさは、直接その対象となっているものにむけられているという以上に、もっと深く、そのような場面で警備行為をさせているモノ～関係に向けられている。自らを疎外し抑圧しているモノ。大和盆地や河内平野の歴史的過程、古代史における制圧過程とも無関係では無い。
１９６９年東大闘争、関学闘争、・・・他、無数に発生した、逮捕時の、警察官による無抵抗者へのリンチ。甲山。自己史。
裁判官らは、リンチの激しさは、自己史の闇の領域～自らをふくむ裁判機構～奴隷的国家公務員体系・・・総体にむけられていること、むろん３・２４当日の訴訟指揮（民事）～３・２４公判（刑事

）審理の場をふくむ全過程に対してもむけられている、と思い知るが故に、決して＜法廷＞内外での警備員のリンチの事実は認めず、意識と証拠から排除し、職場を通じて警備員証言に圧力をかけさえする。自らの存在的限界の内側へ折れ込むようにして。

１９８６・２・１０～３・２４～６・１６～を通じて、すでに審理の時空間の壁は突破されている。このことは、参加者の表現が決して裁判所に向かってだけなされたのではなくα、β、γ・・・μ～全幻想領域を駆け抜け、情況と自らのアワ量の壁を撃ち破って為されていることによる。いまここからどこへどのように向かおうとするか、一人一人に不確定性の渦として問われていたのだから。
その深めかた―――３・２４の総体の真実をどのような本質、断面、あるいは偏差で切断しているか、その根拠と方法が、呼吸として、しぐさとして、歩のすすめかたとして、・・・イマイマに問われている―――。

山田さんにお会いした時、私はこれらのことを、山田さんの心や生き方と少林寺拳法（五段とのことでした）の視点からのお考えをお聞きし、そのことを通じて少林寺の本質に触れ、相互に新たに発生するものがあること、を願っていました。

山田さんが証言された法廷やその後の、被告人質問ぬきの３月３１日判決（無残にレベルの低い内容ではありましたが）法廷にも、これらの＜イノリ＞がヒビイテいたことを、聞き取っていただけることを、念じています。

少林寺拳法の教本には、次の主旨が書かれています。「宗道臣師家は、敵地における敗戦国民の惨めさと悲哀を十二分に体験し、イデオロギーや宗教や道徳よりも国家や民族の利害の方が優先し、力だけが正義であるかのような国際政治の中に身を浸し、その中から知りえた貴重な経験によって、法律も政治のあり方も、イデオロギーや宗教の違いや国の方針だけできまるのでなく、その立場に立つ人の人格や考え方によって大変な差のでることを発見した。かくして、宗道臣は、人、人、人、すべては人の質にあると悟り・・・」
国家の暴力をふくむあらゆる暴力を対象化～転換する＜活人拳＞のココロ（エ）は日々～刻々のあらゆる場～オコナイ～言葉を通じて発現さるべきものではないでしょうか。

（３・２４の前回、１９８６年２月１０日のＡ３６７公判公判と少林寺拳法のかかわりについてはもうひとつの大きなテーマです。）

～１９９２年３月～４月～

＜竹中千恵子＞